

聴衆の反応の違いによる演者が落語中に用いる語り方略の変化について

(研究室) 傳研究室 (学籍番号) 20L1046K (氏名) 山田 知親

1. はじめに

落語で「笑い」が起こる時の要素は「お話のあらすじ」「演者のパーソナリティ」「話し方や演じ方」の三つである。その内の大きい声でゆっくりと話す、身振り手振りを用いるといった話し方や演じ方における工夫を「語りの方略」と呼ぶ。高齢者にはゆっくりと話し、若者には早く話すというように語りの方略は聞き手によって変化させる。そこで聞き手の反応が変化したとき語りの方略がどのように変化するかを明らかにする。

野村・丸野(2006)では語りの方略が実際に観客の「笑い」に影響を与えているかを実験を行った。実験参加者を方略を使用して演じた落語の映像を見る通常群と方略を使用せずに演じた落語の映像を見る抑制群に分けて、映像視聴後に実験者が作成した「笑いの度合い」を測るアンケートに回答させその結果を集計した。その結果、通常群の方が抑制群と比べて「笑い」の程度がより大きかったことがわかった。これは語りの方略が笑いに影響を与えることを明らかにしている。

語りの方略は観客に合わせて使い分ける。つまり観客の「笑い」によって演者は語りの方略を使い分けるはずだと考えた。そこで今回は観客の「笑い」をコントロールして、演者が語りの方略をどう使い分けるのかを明らかにした。

2. 予備実験

2.1. 目的

語りの方略は相手に伝えるための技術だ。しかし、演者の技量が未熟だと観客の反応と関係なく方略を使い分けられない可能性があった。そこで実験を行う前に、どの程度の技量を持った演者なら実験の目的に沿った演技をしてくれるのかを調べた。

安藤(2002)では、演劇に関して演技歴は演者の技量に関係してくるのかを調べた実験を行った。安藤は参加者の熟達度(どのくらい腕があるか)を演劇歴で分類した。演劇歴1年未満の演者を初心者。演劇歴5年未満の演者を中間者。演劇歴10年未満の演者を準熟達者。演劇歴10年以上の演者を熟達者と分類した。安藤の実験の結果、熟達度の段階が進むにつれ、演者の技量が高くなることがわかった。

野村(2005)では安藤(2002)の基準を元に、各熟達度にいる演者は語りの方略をどのくらい適切に使用できるのかを調査した。野村は熟達者、準熟達者、初心者の三名の演者に落語を披露して貰い、その様子を映像で録画した。その後、二名の評定者がその映像を見てどのくらい適切に使用できていたかを評定し、その中で方略の使用が「適切だった」「とても適切だった」と評定された割合を比較した。その結果、熟達者、準熟達者の割合はおおよそ90%でほとんど同じだった。一方で初心者の割合はおおよそ70%で準熟達者と熟達者の結果を大きく下回った。

本実験で協力依頼をする大学の落語研究会会員の多くは初心者もしくは中間者である。しかし野村(2005)では中間者に関するデータがなかった。そのため中間者がどのくらいの割合で語りの方略を

2.3. 結果

評定の結果、語りの方略の使用が「適切だった」「とても適切だった」とされた割合は 67.3%だった。この結果は野村（2005）の初心者の結果に近かった。この結果、野村（2005）の準熟達者・熟達者の割合である 90%に届かなかったため本実験では熟達者、準熟達者に協力を依頼することにした。

3. 本実験

3.1. 目的

観客の反応が変化するとき、演者が使用する語りの方略はどのように変化するかを調べる。

3.2. 方法

3.2.1. 参加者

落語の演者には千葉大学落語研究会に所属する会員 2 名が参加した。演者 1 は千葉大学に所属する 22 歳の女性で、落語歴は 9 年の準熟達者だった。演者 2 は現在千葉大学院に所属する 24 歳の男性で、落語歴は 6 年の準熟達者だった。

聴衆は実験のために集めた千葉大学に通う男女だった。実験は 2 回行われた。各回 1 人の演者毎に促進群、抑制群の 2 つの統制群の前で落語をしてもらった。1 回目は促進群が 6 名、抑制群が 15 名集まった。2 回目は促進群が 8 名、抑制群が 8 名集まった。参加者のいずれも、視力・聴力に異常はなかった。

3.3.2. 会場

会場は千葉大学文学部棟 2 階の画像情報教室を用いた。

3.3.3. 装置

収録には手持ちのビデオカメラ（EIZO, FlexScan L567）を用いた。

3.3.4. 演目

演者 1 は古典落語「平林」を演じた。演者 2 は新作落語「ほんとのこと言うと」を演じた。

3.2.5. 手続き

落語の演者と聴衆を集め落語の撮影を行った。各演者には実験とだけ説明し落語を演じてもらった。撮影は 1 人の演者につき 2 日間行った。それぞれの日程毎に落語に関する実験とだけ伝えた観客を集めて、集まった観客に対して鑑賞の仕方を説明する形で統制を行った。1 日目は積極的にリアクションを行ってもらい促進群を撮影した。2 日目はリアクションを抑えて鑑賞してもらい抑制群を撮影した。撮影が別の日に行われることから途中で練習を積極的に行わせないように抑制群を後半に置いた。撮影が終わった後、評定に先立って落語の演者に聞き取り調査を行った。聞き取りの項目は観客の印象（笑っていたか。笑っていなかったか）方略の意図的な変更箇所（アドリブで加えた方略があったか）方略の意図しない変化（自覚したミスや変化はあったか）の三つだった。後日、収録した映像を評定者に提示し、映像中の落語で語りの方略がどのように用いられているか評定してもらった。評定者それぞれに映像を見てもらい、その中で語りの方略がどのように使用されているのかを評

定してもらった。評定者間で語りの方略が使用されていたかどうか分かれた箇所については後日、話し合いを行い統一した。評定は予備実験でも用いたシートを用いた。

3.3. 結果

聞き取りの結果、演者は促進群で「観客が笑っていた」と答え抑制群で「観客は笑っていなかった」と回答し、観客の反応に演者が抱いた印象は統制群の狙い通りだとわかった。

評定の結果、全てのシーンにおいて促進群と比較し抑制群の時に使用した方略の方が少なくなっていた。また、声に関係する方略は促進群と抑制群とであまり変化が見られなかった。間を使った方略は促進群と比較し抑制群で方略の数が減っていた。

4. 総合考察

評定の結果から、間を使った方略が抑制群の時に比較的少なかったことがわかった。抑制群では観客の反応がないため、間を生むと沈黙がより強調されるので、間を使った方略を使いにくかったのではないかと考えた。

一方で語りに関する方略はあまり変化がなかった。これは落語において最も重視される要素が語りなので、語りに関する方略は重点的に練習されるからだと考えた。

シーンごとに評定結果を見ると、最初のシーンは最後のシーンと比較して変化が少ない。これは、落語の最初では演者が観客の反応を掴めていないため条件間であまり変化がない。それに対して後半は観客がどのような反応を示すのかがわかってくるので観客の反応の影響を受けるのだと考えられた。

また、本実験の結果から語りの方略は観客の反応が薄い時に使用される数が減ることがわかった。語りの方略は聞き手に話を効果的に伝えるための技術だ。であれば聞き手の反応が薄い時に語りの方略が増え、聞き手の反応が大きい時には語りの方略は増えないはずである。だが、本実験の結果はそれとは反対の結果となった。ここから、語りの方略は観客の反応がなければならぬ技術だと考える。

表2 演者1の評定結果

